

I. 下記は、人類学の立場から宗教について論じた文章を一部抜粋したものである。文章をよく読み、以下の設問に答えなさい。なお、答えの冒頭に設問の数字 (1, 2, 3, 4) を記すこと。

さまざまな宗教を全体において理解しようとするとき、最初に眼につくのはその多様な形態である。世界の宗教がいかに多様であり、いかに異なっているか。いくつか具体的なケースをとりあげよう。

中央アフリカのコンゴからガボンにかけての熱帯雨林地帯には、ピグミーと呼ばれる低身長の人びとが暮らしている。熱帯の森のなかで、弓やネットをもちいた狩猟と採集で暮らしてきた人びとだが、近年では農業や賃労働に従事することも一般的になっている。彼らが遠い過去にはアフリカ大陸の広い範囲に存在していたと思われることは、古代エジプトの記録に「神の踊り子であるコビト」という記述があることで確認されている。彼らの一部であるムブティ・ピグミーと呼ばれる人びとの日常生活や宗教生活を詩情豊かに描いたのが、一九五〇年代にコンゴ東部のイトゥリの森に長期滞在して、生活を共にしながら研究をつづけた人類学者コリン・ターンブルであった。

ピグミーの宗教生活の中心にあるのは、すべての恵みを与えてくれる森である。彼らにとって「父親でも母親でもある」森は、食べ物から衣服、家、焚き木、親愛の情にいたるまで、彼らが生きていく上で必要なすべてを与えてくれる。「森の子」を自称する彼らは、森のなかであればなにも恐れることなく安心して暮らすことができる。とはいっても、森も眠ってしまい、「子供たちの面倒を見てやってねえ」ときがある。死や重い病気、諍い、不猟などの不幸な事態が生じるのはそういうときであり、そうした事態が生じると、彼らは森を目覚めさせ、ふたたび保護を与えてくれるよう集団で歌を歌う。また、万事がうまくいっているときも彼らは歌う。「幸せな気持ちを、森も一緒に味わってもらいてえ」からだ。

無伴奏の女性たちのコーラスに、男性たちが唱和したり、踊ったり、儀礼的な所作を加えたりすることで座が盛りあがっていく。歌声が高まると、森は生命の喜びで満たされていくだろう。それは、ターンブルが名著『森の民』で描いたような、支配や闘争とは無縁な彼らの生のあり方を反映して、平和と安穩に満ちたものである。もし集団のなかにあつれきや葛藤が生じたなら、彼らはそれが深刻な事態になる前に集団を分裂させるだろう。もし他の集団が支配しようとしたなら、彼らは自分たちだけが生存の術を知る森の奥深くに避難するだろう。

たえず移動しながら分裂と融合をくり返す彼らの社会生活は、対立や支配を生まないよう見事に設計されているのであり、森に守られながら暮らす彼らの宗教生活には、悪霊や妖術師①などの邪悪な要素は含まれていないのだ。

こうした平穏と安寧に満ちた宗教体系があるかと思えば、対極的なまでに暴力的で破壊的なのが、メキシコの中央高地に誕生したアステカ王国の宗教である。メソアメリカと呼ばれるこの地域では古くからいくつもの王国が誕生したが、そのなかで最大の版図をもち、スペイン人征服者に征服されたことで最後になったのがこの王国であった。アメリカ原産のトウモロコシやマメ類を栽培する発達した灌漑農業と、貴金属やヒスイなどの貴石の長距離交易、そして度重なる軍事遠征によって版図を拡大したこの王国の首都は人口二〇万を超えていた。それがいかに繁栄していたかは、一六世紀のヨーロッパ経済の中心のひとつであったセビリアからきたスペイン人征服者を驚かせたほどであった。

アステカの暦は二〇日ごとに替わる一八か月からなっており、天体の進行や農業暦に沿って月ごとに宗教儀礼がおこなわれていた。儀礼の中心にあったのは、石造りのピラミッドの頂上でとりおこなわれる人身供犠②であった。多くが戦争捕虜であった彼らは、四肢を神官によって押さえつけられ、生きたまま心臓をとり出されて神々に捧げられた。とりわけ重要な儀礼のときには、神官は犠牲者の皮膚をはいで身にまとい、神々に捧げる踊りを踊ったとされている。こうした儀礼は、暦に沿っておこなわれる毎月の行事に加え、戦争のときや王の即位、祭殿の建造時などによりくり返しおこなわれており、まさにこの王国は血にまみれた祭祀国家であった。

アステカの宗教世界は、天の太陽や星々であれ、地の木々や動物であれ、穀物を生い茂らせる大地であれ、生命と運動をもつあらゆるものが血によって維持されるという信念にもとづいていた。そのため、人身供犠は宇宙に活力を与えるために不可欠の行為とされていたのだ。人間が宇宙の進行に関して受動的にとどまるのではなく、積極的に関与するためにも、そしてその暴力性によって人びとの支配を強固なものにするためにも、人間の生命と血を供えつづけることが必要とされていたのだ。

*** (中略) ***

これらの例は人類の歴史に登場した宗教の一部でしかないが、世界の宗教がこれほど多種多様であるとすれば、その全体を理解しようと思えばどうすべきか。そもそも宗教を全体として理解することなど、はたして可能なのだろうか。

世界の宗教がいかに多様であるとしても、宗教に関して確実なことがひとつある。これまでに知られているかぎり、人間以外の動物には宗教が存在しないのに対し、すべての人間社会に宗教が存在していることである。いいかえるなら、宗教とはその形態においては多様だが、その存在は普遍的だということだ。

こうした宗教における多様性と普遍性を考える上で参考になるのは、近親相姦の禁止をめぐるクロード・レヴィ＝ストロースの議論である。多くの人から二〇世紀最大の人類学者と見なされる彼は、社会ごとに異なる婚姻と親族の規則を統一的に理解しようとした。彼によれば、そのために必要なのはその根底にある近親相姦の禁止から出発することだ。そこから、彼はつぎのように論を進めていく。近親相姦の禁止とは規則の一種であり、それは規則であるかぎりでは文化的な事象だが、すべての人間社会に存在するという点では普遍的な事象である。このとき、文化とは、個々の言語や慣習を考えればわかるように、すべて相対的・差異的なものである。これに対し、自然とは、どの人間にも眼が二個で手足が二本ずつあるといった身体の構造を見れば明らかのように、万人に共通し普遍的なものである③。その意味で、文化的＝相対的でありながら普通的＝自然的である近親相姦の禁止とは、自然と文化の双方にまたがる事象、それによって自然から文化への移行が実現された事象と考えるべきだというのだ。

この議論は、おなじように普遍性と多様性を有する宗教について考える上で示唆的だが、そのまま宗教に適用するにはいくつかの問題がある。ひとつは、霊長類の研究が進んでいなかったレヴィ＝ストロースの時代と異なり、今日では霊長類のもとでも近親相姦の禁止ないし忌避が存在することが確実視されていること、つまりそれが文化以前から存在することが明らかなことだ。もうひとつは、あまりに多様で複雑な形態をもつ宗教は、限定的な近親相姦の禁止のように自然から文化への移行の一点として位置づけることができないこと。いいかえるなら、私たちが目にする宗教とは、多様な婚姻や親族の規則が近親相姦の禁止から派生しているように、いまだ明らかにされていない宗教の根幹に関わるなんらかの基本的な事象から派生した複合的の制度と考えられることだ。であれば、この基本的な事象、宗教の誕生の根幹にかかわり、人間を現在かくあるようにした基本的な事象とはなにかを明らかにすることが、ここで私たちの課題となるはずだ。

それを考えていく上で出発点とすべきは、宗教が人間以外の動物には存在しない一方で、あらゆる人間社会に存在するという事実だろう。このことは、宗教が人類進化の過程で生じたある種の必然であったことを示唆している。宗教とは文化的に構築された副次的な事象に過ぎないのではなく、人間を人間たらしめた、文化以前の遺伝学的・生物学的根拠に根ざした必然的事象として理解すべきなのだ。であれば、宗教の誕生をうながしたのがいかなる適応であり、自然選択であったか。そして、いったん誕生した宗教は、人間の社会が経済的・社会的に変化する過程でどのように変化してきたか。（中略）

宗教がいつはじまり、人間社会の変化や発展にともなってどう変化してきたかという問いは、進化論が大きな影響力をもった一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて好んで議論されたテーマであった。それに加わったのは、宗教学や文化人類学、考古学などの分野の研究者であったが、彼らの議論はその当時から科学的根拠のない空論として批判的に見られることが多かった。これに対し、近年になってゲノム解析や脳科学や認知科学が急速に進んだこともあり、生物進化論、社会生物学、進化心理学、大脳生理学、霊長類学、古人類学、認知考古学など、多様な分野の研究者が加わって活発で緻密な議論がおこなわれるようになってきている。（中略）

進化心理学のロビン・ダンバーは、脳の巨大化をもたらしたのは、狩猟などの技術的発達よりむしろ集団規模の拡大にともなう社会的な約束事の複雑化であり、それが社会的緊張を増加させたので、緊張緩和の手段としての毛づくろいや笑い、宗教意識が生じたと考えている。社会生物学のエドワード・ウィルソンや人類学のクリストファー・ボームは、血縁を超える大規模な集団が形成されると利他的行動が必要になったが、それはとりわけ宗教によってもたらされ、それによって倫理性と協調性を高めた集団が自然選択的に優位になったとする。精神医学のフラー・トリーや哲学のダニエル・デネットは、集団規模が拡大するにつれて人間は他者の心を読み解く能力を発達させることが必要になったが、多くの人がおなじ宗教的な観念体系を共有したことで、集団規模のいっそうの拡大と社会的秩序の維持が可能になったとする。

認知考古学のスティーヴン・ミズンらは、言語が誕生する以前に集団で歌ったり踊ったりするようになり、そうした共感的能力の発展が宗教の発生へとつながり、集団の結束を高めたことで人間集団の存続に有利に働いたと主張する。霊長類学の黒田末寿は、人間も含めた霊長類における食物分配に注目し、大きな獲物を獲得したときの集団的な歓喜の行動に宗教的な振る舞いの起源を見ている。動物行動学のコンラート・ローレンツや生態人類学のロイ・ラパポートは、ミツバチの巡回行動やチンパンジーのレイン・ダンスのような儀礼的行動に注目し、反復と定型化を特徴とする人間の儀礼的行動の起源はそこにあると考えている。

これらの研究は、いずれも近年得られた客観的・実証的なデータにもとづいて宗教の起源を論じたものであり、斬新かつ精確な知見をもたらしている。半面、それらは宗教の起源に議論を集中させているため、宗教の初期の形態が具体的にどのようなものであったか、宗教はそこからどのように変化ないし発展したかについては議論していない。それらは、人類進化の一要素として宗教を捉えるだけで、宗教とはなにかに焦点を当てていないわけではないのだ。これに対し、近年いちじるしく発達した大脳生理学の観点から脳の構造と機能の進化をたどることで、神の認識をはじめとする宗教意識と宗教行動の発達をあとづけようとする研究も数多くあらわれている。これらの研究の多くは宗教を神観念と同一視しているが、宗教イコール神の観念とする見方は世界宗教の誕生以降出現した見方に過ぎないのだから、基本的に間違っている④。

（竹沢尚一郎『ホモ・サピエンスの宗教史——宗教は人類になにをもたらしたのか』中央公論新社）

設問1 下線部①の「妖術師」に関する現象について、イギリスの社会人類学者が1937年に刊行した詳細な民族誌がある。その民族誌を記した人物の名前、およびその民族誌で対象となった集団の呼称（いわゆる民族名）を答えよ。

設問2 下線部②にある「人身供儀」という儀礼について、アルフレッド・ラドクリフ＝ブラウンが唱える機能主義の立場に立った

場合、どのように説明することができるか。

設問3 下線部③にみられるような「自然」と「文化」の対概念は、クロード・レヴィ＝ストロースの唱える構造主義の基本的な枠組みであるが、近年この枠組みに対する批判が人類学者によって盛んにおこなわれている。この批判について、知っていることを書きなさい。

設問4 下線部④において筆者は宗教を神観念と同一視する見方の誤りを指摘しているが、では宗教の起源として考えられる現象にはどのようなものがあるか。筆者が想定していると思われる宗教の起源について、人類学の歴史をふまえて推測せよ。

II. 次の問題から3つ選び、冒頭に選んだ問題の記号を明記して、文化人類学の立場から答えなさい。

- A. 国家に関する人類学的研究について知るところを簡潔にまとめ、今後どのような方向に発展すると考えるか述べなさい。
- B. 親族研究の歴史について知るところを簡潔にまとめ、今後どのような方向に発展すると考えるか述べなさい。
- C. 衣を対象とした人類学的研究について知るところを簡潔にまとめ、その意義についてどのように考えるか述べなさい。
- D. 贈与に関する人類学的研究について知るところを簡潔にまとめ、その意義についてどのように考えるか述べなさい。
- E. 医療に関する人類学的な研究について知るところを簡潔にまとめ、その意義についてどのように考えるか述べなさい。
- F. 民族誌を書くことについての議論で知るところを簡潔にまとめ、民族誌の可能性についての考えを述べなさい。

III. 文化人類学コースにおいて今後どのような研究を計画しているか、テーマおよび研究方法を具体的に述べ、主要な先行文献を書き添えなさい。III用解答欄に句読点を含めて300字以内で記すこと。また、関連する卒業論文やゼミ論文（予定を含む）、あるいは既発表論文があれば、欄外（解答欄の下部）にその題目を付記しなさい。外国語の場合は日本語訳を添えること。

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(次頁へ続く)

